様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０１７３２

研究課題名（和文）在日ムスリム女性のスポーツライフスタイルに関する研究

研究課題名（英文）Research on Sports Lifestyles for Supporting Muslim Residents in Japan

研究代表者
上代　圭子（Jodai, Keiko）

東京国際大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：００５６９３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ムスリマは、イスラム教の元、スポーツ参加の際には制約がある。だが、ボーダレス時代を迎え中長期間の日本滞在も増える中、ムスリマのスポーツライフスタイルに関する実証研究がほぼ皆無である。そこで、非イスラム圏に中長期的に生活するムスリマのスポーツライフスタイルとスポーツニーズの情報を収集した。
ムスリマはスポーツ自体に興味がなくやらないが、宗教上の理由が影響していると考えられる。そのため１人または家族と自宅で行うことが多いが、女性専用の施設や設備を望んでいる。また、滞在年数が長くなるとスポーツで困らなくなるが、言葉を話せるようになるからだと考えられる。だが滞在年数に関係なく、お祈りの場所を望んでいる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ムスリマとスポーツに関しては西洋的視点に立った研究が多く、ムスリマの視点からのアプローチは皆無と言っても過言ではない。特に、ボーダレス時代を迎え国外への移動が自由になり、ビジネスや留学などで中長期間日本に滞在するムスリマも増える中、ムスリマのスポーツライフスタイルに関する実証研究がほぼ皆無である。
そのような状況において、本研究はムスリマの視点に立った実証研究であることから、今後も多くのムスリマが中長期的に日本に滞在すると共に、世界的スポーツイベントが開催される中で、ムスリマのスポーツライフスタイルやスポーツニーズを明らかにし、スポーツ政策・ビジネスの基礎資料を提供す点に本研究の意義を見出せる。

研究成果の概要（英文）：Muslimahs are subject to restrictions under Islam when it comes to participating in sports. With the advent of the borderless era and the increasing number of medium to long-term stays in Japan, we find almost no empirical research on Muslimahs' sports lifestyle. Therefore, we collected information on sports lifestyles and sports needs of Muslimahs living in a non-Muslim country for the medium to long term.
Muslimahs staying in Japan are generally not interested in sports and do not participate in them. Religious reasons are considered to be an influence. For that reason, they often do it at home by themselves or with their families. However, they want to have facilities and equipment for the exclusive use by women. Also, as Muslimahs stay longer in Japan, language becomes less of a barrier and participating in sports becomes easier. But regardless of the length of stay in Japan, Muslimahs require a place to pray.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：ムスリマ　スポーツライフスタイル　スポーツニーズ　海外在住経験　不易流行

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

全ての参加国・地域から女性選手が出場し、全競技に女性が参加したことで歴史的な大会となったロンドン五輪（2012）に続き、リオデジャネイロ五輪（2016）では、サウジアラビアからも 4 人の女性選手が出場した。サウジアラビアでは、国内ではイスラム教の元、女性のスポーツ参加は認められていない。

ムスリムの女性（以後、ムスリマと称す。）がスポーツを行う際には、イスラム的服装を着用して行うか、男性が出入りしない閉鎖的な空間（分離策：segregation）で行うことが条件となっている（山岸、2002）。イスラム的服装の代表的なものにヴェールがあるが、ファッション性の体現やアイデンティティを表す手段、ドレスコードの順守などが目的なため、ドレスコードにイスラム教義の意味を見出すことは表層的と多和田(2015）は指摘している。

ムスリマのスポーツに関する研究は、ヨーロッパにおいて労働移動が緩和された 1980 年代から散見されるようになった（DeKnop, et al. 1996）。研究内容は、①スポーツ参加状況（Sferi、1985；Hargreaves、2000；山岸、2002）、②スポーツとアイデンティティ（中村、2002；Benn et al.、2010；Dagkass & Benn, 2006、2011）に集中しており、ムスリマのドレスコードとスポーツ参加に関する研究（Jiwani, 2010; 飛塚, 2007）は極めて少ない。だが、イスラム圏の各国の文化・歴史的背景が考慮されていない点が指摘され、イスラム圏の各国においてムスリマのスポーツ経験をケーススタディとして分析する手法が用いられている（Benn et al., 2011;　Jiwani, 2011; Walseth, 2003）。

以上のように、ムスリマとスポーツに関しては西洋的視点に立った研究が多く、ムスリマの視点からのアプローチは皆無と言っても過言ではない。特に、ボーダレス時代を迎え、国外への移動が自由になり、ビジネスや留学などで中長期間日本に滞在するムスリマも増える中、ムスリマのスポーツライフスタイルに関する実証研究がほぼ皆無であることから本研究に着手した。

本研究では、非イスラム圏に中長期的に生活するムスリマのスポーツを含むライフスタイルにはどのような変容が起きるのか、また「郷に入っては郷に従う」という文化変容（Cultural adaptation）がムスリマにどの程度進行するのか、について着目して実証研究に着手した。

2. 研究の目的

海外在住経験における「不易流行：変容するものと変容しないもの」の視点から、①滞在年数、②性別、③出身国の 3 点を変数として、日本に中長期的に在住するムスリマに関してのスポーツライフスタイルとスポーツニーズの情報を収集し、スポーツ政策の基礎データを提供することを目的とした。

そして、上記目的を達成するために、以下の副目的を設定した。

(1) 滞在年数におけるスポーツライフスタイルの違いを明らかにする。
(2) 性別におけるスポーツライフスタイルの違いを明らかにする。
(3) 出身国におけるスポーツライフスタイルの違いを明らかにする。
(4) スポーツライフスタイルから、スポーツニーズを明らかにする。

3. 研究の方法

3.1. 調査技法の妥当性の確認

予備調査「イスラム系在日外国人のスポーツライフの調査研究」の結果を基に、調査技法ならびに質問紙の妥当性を検討した後、質問紙とガイドラインを 2 ヶ国語（日本語・英語）で用意し、東京国際大学の留学生（N=5）を対象として２回目のパイロットテストを実施して質問紙を完成した（2020 年 4 月～7 月）。

モスク担当者や関連機関の担当者へのヒアリングから、調査対象者として想定されるイスラム圏からの在留者は日本語のレベルがあまり高くないことが判明したことから、専門家に依頼して日本語能力試験 4 級程度の簡単な文言に修正した。

3.2. 質問紙調査およびインフォーマル・インタビューの実施と分析

関西圏のモスクに通い、①宗教的・政治的な調査内容ではないこと、②調査結果は学術目的以外には使用しないこと、③個人情報保護は厳守することを説明し、モスク内外での調査の許可を得た。調査目的に賛同したムスリマに対し、質問紙と筆記用具を配布し調査員が回収を行った（直接配布・回収法）。調査期間は 2021 年 11 月から 12 月であり、3 回実施した。

また、モスクに通わないムスリマについては、公益財団法人日本スポーツ協会が 2021 年 11 月に実施したスポーツイベントに参加したムスリマに対し、直接配布・回収法による調査を行った。有効回答数は 124 票である。

また、モスクやイベント会場において、参加者の年齢・性別・国別などを踏まえ、調査接対象者に対し、直接インフォーマル・インタビューを実施した。

なお、収集した質問紙のデータは、SPSS を用いて分析を行った。

4. 研究の成果

4.1. サンプルの属性

表 1、属性

		%	(n)
性別	男性	67.7 %	(84)
	女性	29.0 %	(36)
	無回答	3.2 %	(4)
	合計	100.0 %	(124)
出身地	日本	4.8 %	(6)
	中央アジア	7.3 %	(9)
	東アジア	0.8 %	(1)
	南アジア	6.5 %	(8)
	東南アジア	73.4 %	(91)
	西アジア	0.8 %	(1)
	アフリカ	0.8 %	(1)
	その他	0.8 %	(1)
	無回答	4.8 %	(6)
	合計	100.0 %	(124)

		%	(n)
婚姻	既婚	40.3 %	(50)
	未婚	54.8 %	(68)
	その他	0.8 %	(1)
	無回答	4.0 %	(5)
	合計	100.0 %	(124)
来日理由	労働	43.5 %	(54)
	公務	0.8 %	(1)
	旅行	1.6 %	(2)
	留学	39.5 %	(49)
	その他	11.3 %	(14)
	無回答	3.2 %	(4)
	合計	100.0 %	(124)

属性は、表 1 に示した通りである。性別は、男性が 60.2%、女性が 34.6%、無回答が 5.2%である。出身地は、東南アジアが 73.4%と最も多く、次いで中央アジア 7.3%、南アジア 6.5%、日本 4.8%と、アジア出身の者が多。婚姻状況は、既婚者が 40.3%であり、未婚者が 54.83%、その他 0.8%、無回答 4.0%であった。来日理由は、労働（43.5%）、留学（39.5%）が多く、その他（17.7%）は家族に同伴である。

4.2. スポーツ・運動実施頻度

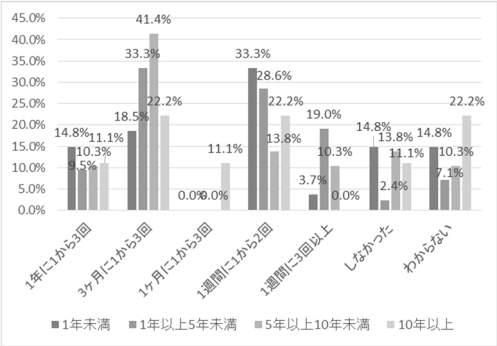


図 1. スポーツ・運動の実施頻度（滞在年数による比較）

実施頻度は図 2 の通り、1 年未満の者は 1 週間に 1～2 回（33.3%）が最も多く、1 年以上 5 年未満と 5 年以上 10 年未満の者は 3 ヶ月に 1～3 回が最も多かった（各 33.3%、41.4%）。

10 年以上の滞在者は 3 ヶ月に 1～3 回と 1 週間に 1～2 回が多かった（22.2%）。

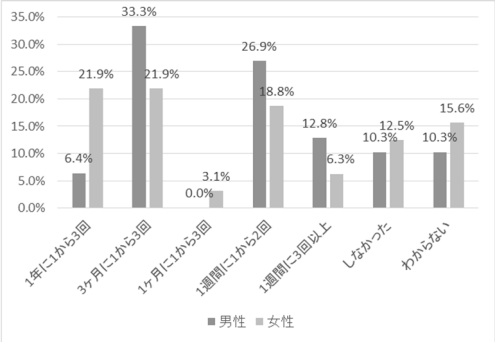


図 2. スポーツ・運動の実施頻度（性別による比較）

1 年に 1～3 回と回答した者は男性が 6.4%、女性が 21.9%と女性の方がかなり多く、しなかったと回答した者も男性が 10.3%、女性が 12.5%と多いことから、男性よりも女性の方がスポーツ・運動を実施していない。

4.3. スポーツ・運動を実施しなかった理由

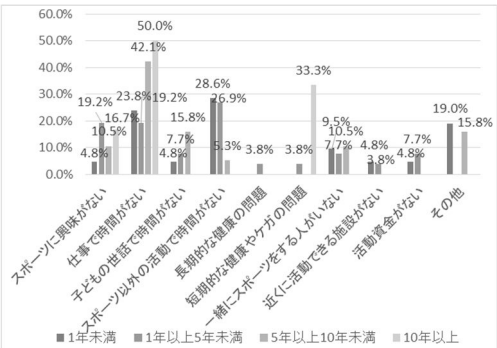


図 3. スポーツ・運動を実施しなかった理由（滞在年数による比較）

スポーツや運動を実施しなかった主な理由を滞在年数別に比較したところ（図 3）、1 年未満の者と 1 年以上 5 年未満の者は「スポーツ以外の活動で時間がない」が 28.6%、25.9%と最も多く、5 年以上 10 年未満と 10 年以上の者は、「仕事で時間がない」が 42.1%、50.0%と多くなっていた。

なお、インタビューより、「スポーツ以外の活動」とはモスクでの活動も含まれるようであった。

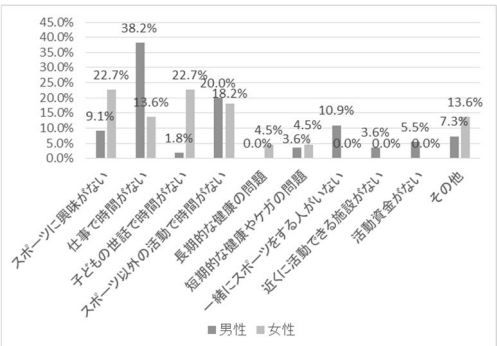
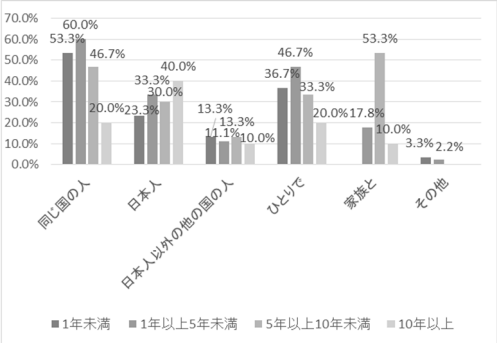


図 4. スポーツ・運動を実施しなかった理由（性別による比較）

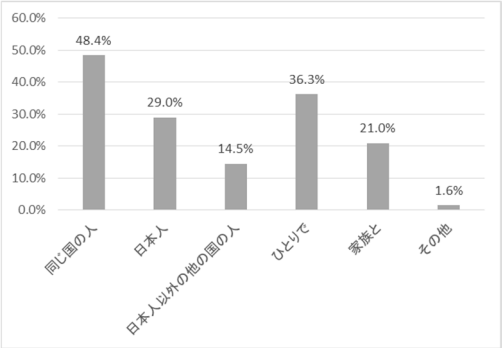
男性は「仕事で時間がない」が 38.2%と最も多いが、女性は「スポーツに興味がない」が 22.7%と最も多く（図 4）、興味自体ないようである。

4.4. スポーツや運動を一緒にやる人



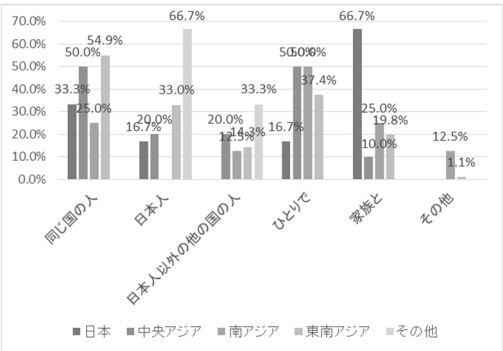
1 年未満の者と 1 年以上 5 年未満の者は同国人と一緒（各 53.3%、60.0%）多かったが、5 年以上 10 年未満の者は家族が 53.3%と最も多く、10 年以上の者は日本時が 40%と最も多くなっていた(図 5)。したがって、滞在が長くなると日本人と一緒に行うようになるようである。

図 5. スポーツ・運動を一緒に行う人（滞在年数による比較）



男性は同じ国の人と一緒にすることが最も多い（50.0%）が、女性は単独（47.2%）や家族（41.7%）で行う人も多い。家族と行う理由について、インタビューによると、ムスリマは家族と一緒に行動する（図 6）。

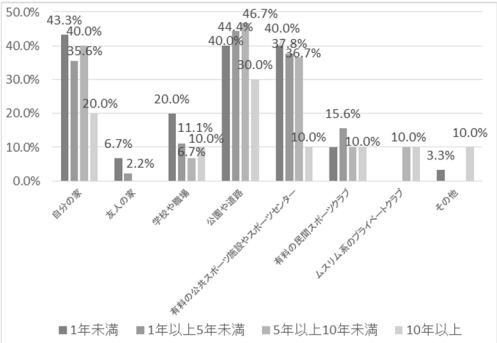
図 6. スポーツ・運動を一緒に行う人（性別による比較）



中央アジアと南アジア出身の者はひとりが最も多い（50.0%）が、東南アジア出身の者は日本人が（66.7%）と最も多くなっていた（図 7）。また、日本出身の者は家族が 66.7%と最も多い。

図 7. スポーツ・運動を一緒に行う人（出身国による比較）

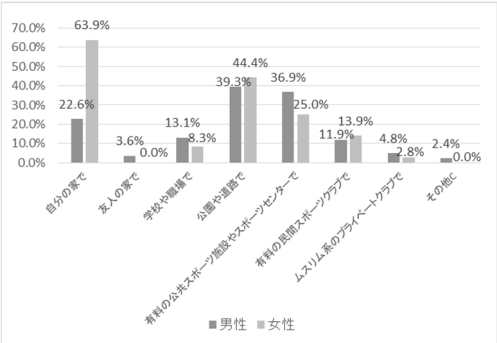
4.5. スポーツ・運動を実施する場所



スポーツや運動を実施する場所を複数回答で聞いた。

1 年未満の者は 43.3%で自宅が最も多いが、1 年以上 5 年未満と 5 年以上 10 年未満、10 年以上の者は公園や道路が 44.4%、46.7%、30.0%と最も多くなっていた（図 8）。

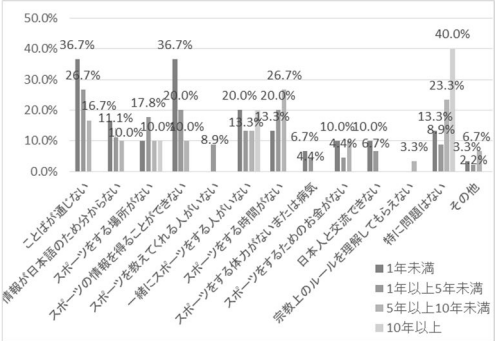
図 8. スポーツ・運動を実施する場所（滞在年数による比較）



女性は自宅が最も多く（63.9%）、次いで、公園や道路（44.4%）となっていた。一方で、有料の公共スポーツ施設やスポーツセンターは、男性が 36.9%に対して、女性は 25.0%であった（図 9）。インタビュー調査から、単独でのスポーツ実施が多いことが影響していると推測される。

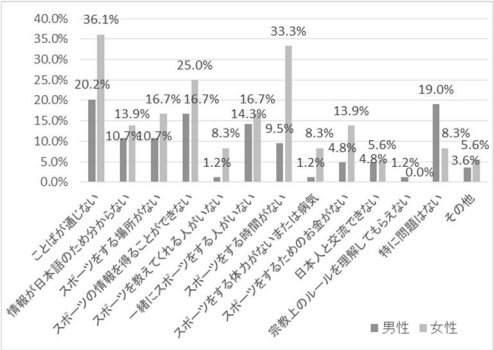
図 9. スポーツ・運動を実施する場所（性別による比較）

4.7. スポーツ・運動を実施する際に最も困っていること



1 年未満の者は各 36.7%で「ことばが通じない」と「スポーツの情報を得ることができない」が多いが、5 年以上 10 年未満の者は「スポーツをする時間がない」が 26.7%と多い（図 10）。また、1 年以上 5 年未満の者も「ことばが通じない」が 26.7%と最も多い。だが、10 年以上の者は「特に問題がない」が 40.0%と最も多くなっており、滞在期間が長くなると解決することも多いと推測される。

図 10. スポーツ・運動を実施する際に困っていること（滞在年数による比較）



男女で比較すると、「ことばが通じない」（男性：20.2%、女性：36.1%）と「スポーツをする時間がない」（男性：9.5%、女性 33.3%）は女性の方が多くなっている（図 11）。

図 11. スポーツ・運動を実施する際に困っていること（性別による比較）

5. まとめ

- 滞在年数が少ない者はスポーツ・運動を同国人と一緒に行うが、長くなると日本人と行う。
- 滞在年数が短い程、スポーツ・運動を実施する上でことばが通じない、スポーツの情報を得ることができないことで困っているが、滞在期間が長くなると困らなくなる。
- 滞在年数に関係なく、お祈りができる場所の確保や設置をして欲しいと思っているが、滞在年数が短い者は色々な言葉で話せる人の配置して欲しいと思っている。
- 女性の方がスポーツ・運動を実施しないが、スポーツ自体に興味がないためである。
- 女性はひとりまたは家族で行うため実施場所は自分の家であり、有料の公共スポーツ施設やスポーツセンターは女性よりも男性の方が利用する。
- 女性は、女性専用の施設や設備の配置して欲しいと思っている。
- スポーツ・運動を実施する上で困ることに、出身国による差異はない。

ムスリマ（女性）はスポーツ自体に興味がないためやらないが、宗教上の理由から女性のスポーツ参加認められていないことが影響しているかもしれない。そして、男性と一緒にスポーツ・運動を実施できないことから、女性はひとりまたは家族で行うため、自分の家で行うことが多い。だが、女性専用の施設や設備の配置を望んでいることから、環境が整えば変わるかもしれない。

また、滞在年数が長くなると困らなくなるのは、ことばができるようになるからだと考えられる。だが、滞在年数に関係なく、お祈りができる場所の確保や設置をして欲しいと思っている。

主な参考文献

- 多和田裕司（2015）マレーシアのムスリム女性に見るイスラーム的装い：消費社会におけるイスラームについての一考察．人文研究，66,：195-210.
- 齊藤一彦・久木留毅・田村進（2001）アラブ諸国における女性スポーツ状況に関する研究－成人女性の身体的特徴及び運動習慣を中心に－．運動とスポーツの科学，7（1）：57-62.
- 塩尻和子（2008）イスラームの人間観・世界観．筑波大学出版会.
- 塩尻和子（2015）生きられる宗教と宗教学 －イスラーム研究再考－．東京大学宗教学年報，第 30 号：71-88.
- 山岸千賀子（2002）イスラーム主義国家イランにおける女性スポーツの推進．日本ジェンダー研究，5：15-28.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 上代 圭子，野川 春夫，秋吉 遼子，工藤 康宏，東明 有美
２．発表標題 イスラム系在日外国人のスポーツ・ライフに関する調査研究
３．学会等名 第68回日本体育学会大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	塩尻　和子 (Shiojiri Kazuko) (40312780)	東京国際大学・国際交流研究所・教授 (32402)	
研究分担者	秋吉　遼子 (Akiyoshi Ryoko) (60738813)	東海大学・体育学部・助教 (32644)	
研究分担者	野川　春夫 (Nogawa Haruo) (70208312)	順天堂大学・スポーツ健康科学部・特任教授 (32620)	
研究分担者	東明　有美 (Tomei Yumi) (90796468)	関東学園大学・経済学部・准教授 (32302)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関